

オックスフォード大学  
REES センター

## お互いに支え合う

里親間のピア交流に関する国際的な文献レビュー  
by Nikki Luke and Judy Sebba

## 謝辞

初期の草稿に寄せていただいた、Estella Abraham 教授、Jason Brown 教授、Jim Cockburn 教授、Wayne Ferguson 教授、Robbie Gilligan 教授、Lisa Harker 教授、Ingrid Hojer 教授、Peter Pecora 教授、Ray Shostak 教授、Ian Sinclair 教授、Frank Ward 教授からのコメントに感謝致します。また、Lynne Blencowe、Crystal Coad、Alex Hamill、Jenny Harris など、コメントや支援して下さった里親の方々にも感謝致します。最終的な文責は著者にあります。

Rees Centre for Research for Fostering and Education (リース里親養育・教育研究センター) は、英国および国際的な里親養育サービスに特に関心を持つ児童サービスの国際的な提供機関である Core Assets の支援を受けています。センターの研究行動計画は、Core Assets および英国内および国際的なその他の主要な利害関係者と協議して作成されています。これらの利害関係者には、子どもとその里親、ソーシャルワーカー、地方自治体、公的部門と独立部門の管理者が含まれます。実施された研究とその公開は、大学の倫理規定によって管理され、特定の利害関係者や資金提供者とは無関係に行われています。

Nikki Luke and Judy Sebba

Rees Centre for Research in Fostering and Education, University of Oxford  
オックスフォード大学、リース里親養育・教育研究センター  
2013年2月

本報告書は早稲田大学社会的養育研究所がオックスフォード大学 Judy Sebba 教授から許可を得て、原著 Supporting each other: an international literature review on peer contact between foster carers An international systematic review(2013)を日本語訳したものです。

日本語訳作成をご快諾いただいた Judy Sebba 教授、監訳チームで本論文をご担当いただいた神戸市総合療育センターの中川 友生氏、そして本事業に助成していただいた日本財団に心より感謝申し上げます。

早稲田大学社会的養育研究所  
所長 上鹿渡和宏

## 目次

要旨.....	3
主な知見 .....	3
政策と実践のための提言.....	4
研究のための提言.....	5
背景.....	5
目的と範囲.....	6
方法論.....	7
研究状況 .....	8
主な知見 .....	9
里親間のピア交流の性質とは何か? .....	9
ピア交流は何を提供するのか? .....	10
ピア交流は、里親、子ども、里親委託措置の成果をどの程度改善するのか? .....	15
里親同士の交流を増やし、それによって成果を改善する可能性がある介入とは? .....	17
現在のエビデンスベースの限界.....	17
結論.....	18
政策と実践のための提言.....	19
研究のための提言.....	20
参考文献 .....	21
付録 - 表 1.....	24

## 要旨

ほとんどの里親は自分の里親としての役割に大きな満足を得ている (Sinclair et al., 2004)。しかし、里親としての日々の経験は里親のストレスを高めてしまう (Cole and Eamon, 2007; Farmer et al., 2005; Sinclair et al., 2004)。積み重なるストレス要因 (例えば、子どもの挑戦的な行動) は、里親や里親が養育する子どもたちの幸福に悪影響を与えるだけでなく、里親委託措置の安定性や里親の定着性にも影響を与える可能性がある。ストレス要因が適切に管理されていない場合、これらのストレス要因に対する里親の反応は、ケアを受けている若者に伝わり (Farmer et al., 2005)、自分のニーズは他の人のニーズと比べて二の次だと感じさせる可能性がある。里親のストレスを軽減し、それによって成果を改善する可能性を高めるためには、里親と里親支援ソーシャルワーカーとの間の公式な関係を超えて広がる里親支援システムが必要である。ほとんどの里親は家族や友人からの支援に満足しているが、里親養育提供機関は里親がこのような非公式な支援を受けられるかどうかについて影響を与えることはほぼできない (Sinclair et al., 2004)。したがって、里親同士の交流の機会を増進することで得られる潜在的な利益は調査する価値がある。

本レビューは、里親同士のピア交流<sup>監訳者注<sup>2</sup></sup>に関する国際的な研究のレビューである。里親同士の交流の方法、どのような形態で支援や学習が行われているのか、そして成果にどのような影響があるのかを明らかにすることを目的とした。主な課題は以下の通りであった。

- 里親同士のピア交流の性質とは何か、また何を提供するのか。
- ピア交流は、里親、子ども、里親委託措置の成果をどの程度改善するのか？
- 里親同士の交流を増やし、それによって成果を改善する可能性がある介入とはどのようなものか？

電子データベースおよびウェブサイトを利用して、英国、アイルランド、北アメリカ、オーストラレーシア (オーストラリア+ニューージーランド+南太平洋諸島) の研究 33 件を確認した。2000 年以降に発表された研究のうち、親族里親以外の里親同士の相互支援方法の詳細な記述が含まれている研究はすべて確認された。研究では詳細なインタビュー調査や事例研究から大規模な調査まで、さまざまな手法が用いられた。

疑問を解決するための研究にはいくつかの欠点が指摘されており、調査結果を報告する際に、信頼性の低い研究はあまり重要視されなかった。多くの研究は小規模であり、成果の変化を確認するために外部からの追加的な測定を行うことなく、里親のみを頼りにしていた。交流の機会の前後で成果を検証した直接介入研究はなかった。最後に、このレビューでは、オンラインでの交流に関するエビデンスに関して、文献に意見の不一致があることが明らかになった。

<sup>監訳者注<sup>2</sup></sup> ピア peer とは、仲間、同じ立場のものという意味であり、ピア交流とは同じ立場のもの同士の交流である。

## 主な知見

レビューの結果、里親同士のピア交流に関する文献には重要なテーマがあることが明らかになった。

● 里親同士のピア交流は、里親への助言・監督をする里親支援ソーシャルワーカーや家族、友人によって提供される価値のある支援ネットワークよりも、感情的支援 (思いやりと共感の提供)、手段的支援 (具体的な援助)、情動的支援 (問題解決を援助する)、評価的支援 (有益なフィードバック) のニーズなどの、数多くの重要な支援ニーズを満たすことができる (Hinson Langford et al., 1997)。さらに、ピア交流は里親が経験する孤立感に対処するのに役立つ可能性がある (Blythe et al., 2011)。

● グループミーティングが「井戸端会議」になることや、ソーシャルワーカーを非難する場になれば、里親同士の交流もあまり良い経験とならない (Murray, 2007)。グループのファシリテーター<sup>監訳者注<sup>3</sup></sup>、それはセラピストが担うべきだという指摘もあるが (Hughes, 2004)、その重要な役割は里親が悩みなどを打ち明ける機会が悲観的で気落ちするような議論にならないようにすることである (The Fostering Network, 2009)。

・ピア交流と、里親、子ども、里親委託措置の成果との直接的な関係を調べた研究は、わずか4件のみであった。2つの研究では、ピア交流とそれによって得られる、自分は支援されているという里親の認識が、里親を続ける可能性を高めること (Rhodes et al., 2001; Sinclair et al., 2004) や養育へのより前向きな態度 (Sinclair et al., 2004) と関連していることが示された。さらに、3つ目の研究ではピア交流の増加とうつ病となる可能性の低下との関連が示された (Cole and Eamon, 2007)。4つ目の研究は、レスパイト<sup>監訳者注4</sup>ケアを利用する機会を増やすことで、措置解除を避けられることを示した (Northwest Institute for Children and Families, 2007)。

・自治体や独立型里親養育機関は、「すべてに当てはまる」アプローチでは効果が期待できないと考えており、そのためにさまざまな形態のピア交流を提供している。里親同士の出会いの場として、地域の支援グループ、権利擁護団体、社会的交流、研修会、メンター制度やバディ制度<sup>監訳者注5</sup>などがある。

<sup>監訳者注3</sup> グループ活動が円滑に行われるように支援する役割を担う人。

<sup>監訳者注4</sup> 養育や介護に当たる家族が一時的に解放され休息をとること。

<sup>監訳者注5</sup> 先輩里親が経験の浅い里親とペアになりサポートする制度。

国際的な文献から、里親が他の里親と会って互いに学びあい、社会的孤立を避けるために問題を相談して安心し、問題を共通理解する他の里親と話す機会があることは重要な要素であることが明らかになってきた。里親養育において、時期による必要な支援の違いや個々の里親が求めている支援の違いを考慮する必要があるため、「すべてに当てはまる」アプローチが有効となる可能性は低い。しかし、里親の認識には共通点があることから、今回の調査結果がより広い範囲で関心をもたれ、政策や実践に活用される可能性がある。

国際的な文献レビューを見ると、ピアサポートの研究の進め方には改善の余地がある。研究前後の評価結果をピア交流の経験に直接関連付ける介入デザインは少ないが、調査結果の妥当性を高める可能性がある。

## 政策と実践のための提言

このレビューでは、特に子どもへの有効性について明らかになったエビデンスは限られていた。しかし、いくつかの研究で里親の定着率、里親の精神衛生、そして里親委託措置の安定性の向上を示すエビデンスが明らかになっており、今後の方向性が示されている。里親養育提供機関は、これらの調査結果の中から選択して、里親同士のピア交流やピアサポートを増進する方法を開発することができる。これらの介入は、比較群を用いて厳密に評価され、大規模な展開のためのエビデンスとなるであろう。

・ニーズを特定すること：ピアサポートの提供は、里親主導で行われるべきである。このことは、里親養育提供機関が提供するピアサポートが、里親のニーズと合致するように、里親と相談する必要があることを意味している (Clarke, 2009)。

・メンター制度とバディ制度：新しい里親と経験豊富な里親の組み合わせは、特にこの関係がメンター制度のように形式化されている場合には、双方に利益をもたらす可能性がある。その際には経験豊富な里親も支援を必要とする新たな課題に直面するかもしれないことを認識する必要がある (Newstone, 2008)。

・既存のサービスに機会を組み込む：里親のための定期的な研修会に、里親が自らの経験や問題解決の方法を共有する機会を設けるべきである。これらは、特定の状況下で里親の効力感を高め、孤立感を減らすことが研究で示されている (例：Golding and Picken, 2004)。

・地域の里親グループの提供：可能であれば地域のグループを提案し、里親が地理的に分散している場合 (例：農村部) にはオンラインでの代替手段を提供する。里親の中には、地理的な距離があるために、里親が集まる場への参加を控える人もいる (Heath and Newstone, 2010)。

・オンラインサポートの効果的な促進：里親にコンピュータとインターネットへのアクセスを提供する計画 (例：Finn and Kerman, 2004) では、これらが提供するピアサポートの機会を明確にする必要がある。オンラインでのピア交流は、一部の里親にとっては魅力を感じないかもしれない。しかし里親養育提供機関が継続的な訓練や支援を含め、インターネットサービスに時間と資源を割くことで、里親同士の

交流を支援することができる (Dodsworth et al., 2012 年)。

・グループの効果的な活動促進の支援 : いくつかの研究 (例 : Maclay et al., 2006) では、里親はソーシャルワーカーから独立した支援グループを希望しているが、経験豊富な里親、セラピスト、またはソーシャルワーカーによる支援グループの効果的な活動の促進を保障する必要性も認められている (The Fostering Network, 2009)。

・条件付きの守秘義務の展開 : グループでの話し合いで、里親が「心を開く」ことができると感じることと、守秘義務を果たす必要があることの間には緊張関係がある (Murray, 2007)。Hardwick (2005) は、条件付き守秘義務を課すことが支援のために有益な場合があることを示している。

・レスパイト制度の開発 : 里親養育提供機関は、一人の里親がレスパイトを承認され、その里親のコミュニティで子どもを預かる対応がなされるという「ハブ」および「コンステレーション」と呼ばれるコミュニティを開発する可能性を探ることができる (モッキンバード・ファミリー・モデルを参考)。

## 研究のための提言

このレビューでは、里親同士の交流機会を増やすことでピアサポートを向上させることを目的とした研究が不足していることが明らかになった。同様に導入、指導、研修、監督など里親養育を向上させるためのより一般的な取り組みに当事者である里親を含めることの効果についての研究も不足していた。これらの分野における評価研究は、主に里親からのフィードバックと、里親が提供された活動へ参加した場合に限られている。このエビデンスは、支出を正当化したり成果を保証するのには不十分である。そのため以下のような研究が必要である :

- ・ピア交流と、里親の意欲、満足度、定着度、子どもの行動、発達、幸福度、里親委託措置の安定性などに関する成果との直接的なつながりを検証する。
- ・介入の前後、無作為化対照試験、独自の対照デザイン、対照群や比較群などの厳格な評価法を使用する。
- ・里親の支援、導入、メンター制度、研修、継続的な専門能力の開発に里親を参加させることの効果を体系的に検討する。
- ・レスパイトと支援を提供するためのモッキンバード・ファミリー・モデルの他国での普及や、里親と子どもを支援するための新しい技術の利用など、期待もてる介入を検討する。

## 背景

里親は、社会の中で素晴らしい役割を担っている。他人の子どもの世話を、時には長期間にわたって行うことで、さまざまな報酬や費用が生じる。子どもの健康や子どもの行動の前向きな変化を見る機会があるなどの利点は、多くの里親がこの任務をやりがいのある任務だと感じていることを意味しており (例 : Centre for Excellence in Child and Family Welfare, 2007)、里親の大多数が、里親であることに多くの満足感を得ていると報告している (Sinclair et al., 2004)。それでも、里親の役割と責任により、里親は実親が直面するものとは量的、質的に異なる多くのストレスにさらされている。さらに、里親委託措置は、里親のキャリアの各段階でストレスの程度が異なり、身体障害のある親族を介護する場合など、他のタイプの里親とは異なるニーズがある。

里親は、ニーズが非常に複雑である子どもや若者の世話をするという課題を日々経験している。エビデンスによると、里親養育で育つ子どもたちは、精神衛生上の問題や社会性の問題を抱えるリスクが通常よりも高いことが明らかになっている (Tarren-Sweeney and Hazell, 2006)。また行動障害や ADHD などの行動上の問題も抱えている (Garland et al., 2001)。英国政府の最新の統計によると、「社会的養育」のもとで育つ子ども (里親養育で育つ子どもを含む) は、教育的成果の面で同世代の子どもたちに比べて著しく遅れをとっていることが示されている (Department for Education, 2012)。さらに、里親は、養育している子ども・若者からの身体的・性的虐待の申し立てに直面することもあり、また、措置解除という悩みに直面することもある。

里親は、養育をはじめると、生活様式が変化する。里親は、身体の不自由な子どもを受け入れるために、家を改修する必要があるかもしれない。さらに、必要とされる委託のレベルは、里親の仕事や社会生活に

大きな影響を与える (Nutt, 2006)。里親は、任務の性質上だけではなく、養育する子どもの特性上からも、社会的に孤立する危険がある。里親へのインタビューによると、不適切な社会的行動をとる子どもや若者と付き合うことに気が引けるとい理由から、里親と以前から付き合いのある友人が疎遠になることが語られている (例: Blythe et al., 2011)。子どもたちの行動は、近所の人や友人さらには家族までもが、無知や同情心の欠如から、里親に対しての批判や敵意を抱くことを意味する (例: Sinclair et al., 2004)。

里親のストレスは、里親、里親に養育される子ども、そして里親委託措置の成果に悪影響をおよぼす。里親は自分の役割に満足していない可能性が高く、感じているストレスが高い場合には、里親をやめると決断する可能性が高い (Sinclair et al., 2004)。Farmer et al. (2005) は、里親の積み重なるストレス経験は、子どもが里親から丁寧な養育を受けることが難しくなることを意味しており、措置解除のリスクを高めると結論づけている。里親の数が国際的に不足しており (Colton et al., 2008)、里親養育提供機関が、例えば英国政府が定めた里親委託措置の安定性に関する目標などを達成することが困難である (Rostill-Brookes et al., 2011)。それを考えると、里親の定着と里親委託の場を維持する要因である里親のストレスを軽減することは里親養育提供機関にとって重要な目的となるべきである。

里親養育におけるストレスについてのエビデンスは、里親が特に支援を必要としていることを明らかにしている。里親養育提供機関からのトップダウンの支援は、里親の満足度を高めるために重要であることは良く知られており (Murray et al., 2011)、里親をやめた人は、支援が不十分であったと述べる傾向が強い (Triseliotis et al., 2000)。

多くの里親が里親養育提供機関から受ける支援に満足している一方で、ソーシャルワーカーと連絡をとることや適時的な返信を受けることが難しいと報告する人もいる (Farmer et al., 2005; Selwyn and Quinton, 2004)。これらの問題は里親の緊張感に影響を与えるが、身近な人からの支援はこの緊張感を和らげることができる (Farmer et al., 2005)。他の里親との交流はすべての里親が選ぶ支援ではなく、約 3 分の 1 が地域の里親グループの会合に出席することや、他の里親から支援を受けていないと報告している (Dodsworth et al., 2012; Sinclair et al., 2004)。しかし、多くの研究 (例: Warman et al., 2006) は、里親は他の里親からの支援を重要視していることを報告している。したがって、里親同士の交流の役割を調べることで、里親の満足度を向上させるピアサポートの機会を特定することができ、その結果、里親、子ども、里親委託措置の成果に影響を与える可能性がある。

ピア交流は、里親のニーズに応じて、さまざまな種類の支援を提供することが期待される。Hinson Langford ら (1997) は、支援の側面として、感情的側面 (思いやりや共感の提供)、道具的側面 (具体的な支援)、情動的側面 (問題解決の支援)、評価的側面 (肯定的なフィードバック) を特徴として挙げている。里親同士の交流に関する文献レビューでは、それぞれの支援の側面のエビデンスが特定されることが予想された。さらに、高齢者などの社会的に孤立している可能性のある集団を対象とした研究 (例: Cohen et al., 2006) と同様に、当事者同士の交流の重要な利点として、当事者からの支援が行われることが予想された。

## 目的と範囲

この国際的な研究のレビューでは、里親同士がどのように交流しているのか、その方法、その交流から得られると思われる利益について取り上げている。これは、里親同士のピアサポートを向上し、里親の満足度と定着率を高め、養育中の若者との関わり方や、里親委託措置の成功につながる可能性のある戦略を明らかにするために実施されたものである。主な調査課題は以下の通りであった。

- ・里親同士のピア交流の性質とは何か、また何を提供するのか。
- ・ピア交流は、里親、子ども、里親委託措置の成果をどの程度改善するのか？
- ・里親同士の交流を増やし、それによって成果を改善する介入とはどのようなものか？

本レビューでは、里親支援ソーシャルワーカーや他機関のスタッフ、里親の家族や友人から受けた支援については触れていない。

## 方法論

このレビューは、里親同士がどのように交流しているのかについてと、その交流がもたらす利点について、国際的な文献から得られた知見をまとめたものである。英国、アイルランド、北米、オーストラレーシア（オーストラリア+ニュージーランド+南太平洋諸島）で行われた研究が含まれている。Medline、PsycInfo、ASSIA、SCOPUS、Social Policy and Practice、Social Services Abstracts、Social Sciences Citation Index を含む多数の電子データベースを検索した。さらに、British Association for Adoption and Fostering、National Foundation for Educational Research、The Fostering Network、Social Care Institute for Excellence、What Works Clearing House、Casey Family Programs などの主要な小児研究機関のウェブサイトを検索し、関連する出版物を調査した。検索には、「里親養育」、「里親」、「代替養育」、「家庭外養育」などの里親制度に関係する多様な国際的な用語や、「里親間」、「ピアサポート/学習/交流/メンター/バディ」、「他の里親との交流」、「里親研修/支援」、「支援グループ」、「社会的支援」、「相互作用」、「ネットワーク」などのキーワードを含めた。検索対象を 2000 年以降の出版物に限定し（ただし、過去 10 年間に非常に多く引用された研究は全て含めた）、参考文献は関連性があるかどうか確認した。親族でない里親のピア交流の経験に焦点を当て、詳細なインタビューから大規模な調査に至るまで、あらゆる方法を用いた研究をすべて対象とした。

この検索プロセスと、特定された研究の参考文献から、里親養育におけるピア交流の役割に関する実証的なデータを報告した 33 の雑誌論文、小冊子、報告書が特定された。確実性の低い研究は除外しなかったが、調査結果とその意味についてはあまり重視しなかった。研究のうち 13 件は、全部または一部が、里親支援グループの会合やバディ制度などの特定の形態のピアサポートの評価に焦点を当てたものであった（例：Clarke, 2009; Heath and Newstone, 2010）。さらに 11 件の研究では、里親への里親養育の経験に関する質問の中で、ピア交流の価値についての議論が含まれていた（例：Maclay et al., 2006）。2 件の研究では、里親養育に必要だと感じる支援の種類を里親に具体的に質問していた（Hudson and Levasseur, 2002; Ivanova and Brown, 2010）。さらに、「支援の手が届きにくい」里親が直面する学習の障壁に焦点を当てた 1 件の研究（The Fostering Network, 2009）や、参加者が自発的にピア交流の価値について言及した里親研修プログラムの評価を目的とした 6 件の研究（例：Golding and Picken, 2004; Warman et al., 2006）からもさらにエビデンスが得られた。

このレビューに含まれる 33 件の研究のうち、ピアサポートと関連する成果との関連を調べたのは 4 件のみであった。これらの研究は、里親の抑うつ状態のレベル（Cole and Eamon, 2007）、里親を継続するかやめるかの決定（Rhodes et al., 2001; Sinclair et al., 2004）、里親養育に対する態度と緊張感（Sinclair et al., 2004）、および里親委託措置の安定性（Northwest Institute for Children and Families, 2007）に焦点をあてていた。残りは、里親がお互いから得たと感じる支援についてのエビデンスを提供しているが、この支援が成果に与える影響については報告されていない。

## 研究状況

里親のピア交流に関する研究は、主に質的研究であり、ピア交流の利点を認識している里親や里親養育提供機関へのインタビューが含まれている。また、少数の研究ではあるが、一般化を可能にするピア交流の成果の定量的な評価も含まれていた。レビューされた研究には、インタビューを用いたものが 15 件、グループインタビューやワークショップを用いたものが 13 件、対面でのアンケート調査が 6 件、郵送、オンライン、電話によるアンケート調査が 18 件、観察データが 1 件、事例研究が 1 件含まれていた。これらの研究は以下の国で実施された。異なる背景や制度が存在するため、調査結果の転用には限界があることを認識する必要がある。

イギリス 19

アメリカ 5

オーストラリア 3

カナダ 3

ニュージーランド 2

アイルランド 1

研究の詳細は付録の表 1 に記載されている。

## 主な知見

### 里親間のピア交流の性質とは何か？

里親同士のピア交流に関する支援は機関によって異なる。Newstone (2008) は、里親を配置した悩み電話相談サービス、支援グループの会合、里親が営む里親養育クリニック、里親のためのオンラインチャットルーム、社会的イベントの企画など、多くの取組みを確認している。しかし、これらのすべてが文献で調査されているわけではない。我々のレビューでは、半数以上の研究 (19/33) が、英国の「里親養育協会」(Heath and Newstone, 2010) のような権利擁護団体を通じて、またはモッキンバード・ファミリー・モデル (Northwest Institute for Children and Families, 2007) のような公式な支援制度を通じて地域の支援グループ (例: Metcalfe, 2010) で行われるピア交流を対象としていた。また約3分の1 (12/33) の研究が里親研修の場での交流について述べており、会合は専門職 (例: Allen and Vostanis, 2005) や他の里親 (例: Sinclair et al., 2004) が担当していた。他の3分の1 (13/33) の研究は、里親同士の個人的な交流について言及しており、それが公式なメンター制度 (例: McInerney, 2009) の一部であるか、非公式の「仲間」との連携 (例: Rhodes et al., 2001) または里親がグループで出会った後に生まれた友情 (例: Ogilvie, 2006) であるかは問わなかった。1件の研究 (Cavazzi et al., 2010) のみが、特定の形態のピア交流を指定していなかった。

ピア交流の限界を認識することが重要である。いくつかの研究 (例: Murray, 2007) では、ピア交流が必ずしも有益なものではないと指摘し、ピア交流が有益なものであるためには、効果的な活動促進の支援が重要な役割を果たすことを指摘している。さらに、家族向けの交流行事やスポーツイベントなど、里親が集まる非公式な交流の例が数多くあるが、評価の対象となっていないために文献には反映されていない。

### 公式な交流の評価

7件の研究では、里親に特定の公式な交流方法の利用についての評価を求めた。このうち2件の研究では、グループ研修プログラム (Ogilvie et al., 2006) や地域の支援グループ (Sinclair et al., 2004) の会合に参加した里親は、他の支援形態よりも他の里親に支えられていると感じていたことを報告している。

里親にピア交流の手段に対する満足度を尋ねたところ、さまざまな意見があった。米国の里親を対象とした調査 (Cole and Eamon, 2007) では58.7%の里親が里親支援グループに参加したことがあり、それが「やや役立つ」、「役立つ」、「非常に役立つ」と回答している。Clarke (2009) は別の満足度の尺度を用いて英国で調査を行った。その結果、里親養育サービスが主催する支援グループを「優れている」または「良い」と回答した里親は44%にすぎなかった。ある回答者は、地域の「支援」グループの参加経験から、支援というよりも研修が意図されていたため、自分たちが求めているような支援を提供してくれなかったと述べている。

里親から里親への支援に明確に焦点を当てた制度は、より高く評価されているようであった。米国の「モッキンバード・ファミリー・モデル」では、6~10軒の里親家庭と、レスパイト (計画的なもの、危機的なもの) や情報、社会活動を提供する認可を受けた1軒のハブホームからなる「コンステレーション」を設置し、社会的支援を提供する「マイクロコミュニティ」を形成している (Northwest Institute for Children and Families, 2007)。毎月のミーティングやその他の活動に参加した里親は、他の里親と「有益なつながり」が築けたと語り、活動に参加しなかった人でも、利用可能なコミュニティ支援を歓迎していた。この仕組みに参加している里親の大多数 (73~93%) は、他の里親と会うことや電話で話すこと、研修に参加することで支援されていると回答しているが、この仕組みに参加していない里親ではわずか17~36%の回答であった。

英国では、里親の75%が地域の里親養育協会（権利擁護団体）を「良い」、「まあ良い」と述べ、56%がピアメンター制度を「良い」、「まあ良い」と述べた（Clarke, 2009）。McInerny（2009）がインタビューした6人のアイルランド人の里親のうち、4人が地域の支援グループに参加していた。2人は支援グループに肯定的であったが、それ以上に個人的な里親とのつながりを重視していた。1人は、支援グループが貴重な支援源であると同時に、里親が他者に対して抱く否定的な感情を助長するおそれもあると感じていた。別の1人は支援グループには公式の支援システムが欠けていると感じていた。同様に、Murray（2007）のニュージーランドにおける里親へのインタビュー調査では、支援グループは役に立つ反面、マイナス面として「井戸端会議」またはソーシャルワーカーを非難する場になりがちであると感じていた。

## ピア交流は何を提供するのか？

### 互いに学び合う

今回のレビューで最も多く挙げられた利点は、他の里親の経験から学ぶことができるという点であった。研究者が里親に、里親委託措置を成功させるためにはどのような支援が役に立つかと質問したところ、「共有による教育」の必要性が指摘された（Ivanova and Brown, 2010; The Fostering Network, 2009）。このことは、里親に集団での研修プログラムの評価を求めた場合にも、この点が共通していた。多くの論文がアタッチメント理論とトラウマ（Allen and Vostanis, 2005; Golding and Picken, 2004; Laybourne et al., 2008）、ペアレンティング・スキル（Golding and Picken, 2004; Pallett et al., 2002）および性化行動をとる子どもの養育（Hardwick, 2005）に関する研修の場において集団での話し合いと共同での問題解決を行なっていることを取り上げていた。

このプロセスの実例は、Pallett et al.（2002）によって紹介されており、「フォスタリングチェンジ」研修プログラムに参加した里親には、子どもの問題に対応するための「宿題」として実践的な技術を毎週試してもらおうという課題が与えられた。次のセッションは、これらの技術がどれほどうまく機能したかについて話し合うことから始まった。あまりうまくいかなかった場合には、グループのメンバーが問題解決を手伝うことが奨励され、参加者全員が使える創造的で柔軟なアプローチを発展させることを目的とした。同じ研修プログラムについて別の報告書（Warman et al., 2006）でも他者から学ぶことの価値が強調されており、トレーナーの役割はグループ学習の円滑な進行を促すことであり、集団での話し合いで各メンバーの長所を引き出し、他のメンバーがその経験から恩恵を得られるようにすることであると述べられている。この研究やThe Fostering Network（2009）の調査では、このような話し合いの機会は、他のグループメンバーの成功に刺激をうけ、互いの失敗から学ぶことができると述べている。

実際、「誰もが時々間違ってしまう」というメッセージは、研修プログラムの学習過程の中で重要な点であると見なされていた。里親は、何が悪かったのかについて仲間の経験を聞くことを大切にしており（Golding and Picken, 2004; The Fostering Network, 2009）、また他の里親が同じような失敗や挫折を経験していることを知り、大いに安心した（Pallett et al., 2002）。この種の話し合いを促すためには、トレーナーやファシリテーターが非難したり、個人的な失敗を感じさせない雰囲気を作ることが重要であった（Warman et al., 2006）。

しかし、互いに学びあう機会は公式の研修プログラムに限定されるものではないと考えられた。里親は、地域の支援グループ（Brown et al., 2005; Hudson and Levasseur, 2002; McInerny, 2009; Metcalfe, 2010; The Fostering Network, 2009; Triseliotis et al., 2000）や、他の里親との定期的な電話（Maclay et al., 2006）やインターネットでの交流（Dodsworth et al., 2012）の際に、仲間から助言やアイデアを受けることができると感じていた。実際 Sinclair et al.（2004）の研究では、質問された里親の約70%が非公式に仲間に連絡して実践的な助言を受けることができると回答しており、定期的に支援グループの会合に出席する人では、この数字は90%に跳ね上がった。しかし、里親養育提供機関の規則により連絡先を知ることができないため、一部の里親は他の里親と交流する機会が制限されていると感じていた（Heath and Newstone, 2010）。里親養育提供機関は、これらのイベント中の保育の費用を負担しているところもあったが、保育施設の不足のために研修や支援グループに参加することが妨げられていると感じた里親もいた（The Fostering Network, 2009）。

他の里親との個人的な交流は、子どもの行動に対処するためのアイデアを集めるために利用するだけでなく、ソーシャルワーカーに対処するためのアドバイスを提供したり (Murray, 2007)、また里親を始めた時期に持ついくつかの質問に答えるのに役立つ (Newstone, 2008)。ピアメンター制度は、このような幅広く実用的な助言を共有するための有効な方法と考えられており、里親は、メンター制度の関係が、キャリアアップに必要な自信と技術を身につけるのに役立つと指摘している (Newstone, 2008)。

メンター制度は、メンター (助言や指導する側) だけでなくメンティー (助言や指導を受ける側) にもさまざまなメリットをもたらす。Bedfordshire 郡評議会の事例研究では、同郡の里親は、メンター研修制度で認定資格の取得を目指す機会があることを高く評価していた (Newstone, 2008)。さらに、The Fostering Network (2006) は、メンター制度は、引退を希望する里親が知識や専門的な意見を提供し続ける機会にもなると指摘している。著者らはメンターの役割を明確にし、守秘義務の問題を強調し、あらゆる支援手段の知識を深めるために、メンターに研修を提供すべきであると提言した。同様に Newstone (2008) の研究では、回答者は目的が不明確な制度を設定することに対して注意を促し、ある地方自治体では、経験豊富な里親が新しい里親の自信を傷つける可能性があることを警告している。

メンター制度以外にも、英国の地方自治体の里親グループが運営する里親養育協会のような権利擁護団体も、他者から学ぶ貴重な場であり、双方にとって利点があると考えられていた。Heath and Newstone (2010) は、里親養育協会の役員にインタビューしたところ、里親の意欲や評判の向上、里親養育チーム内での地位の向上、専門家ネットワークの強化、地域の政策や実践に影響を与える能力、新しい技術の開発など里親養育協会の多くの利点を挙げた。中でも最も多く挙げられた利点は、会員により良い支援を提供することであった。里親養育協会は、この目的を達成するために、里親のための公式および非公式のさまざまな支援システムを提供したが、その多くは社会的なイベントを中心に展開されていた。地域の里親養育協会を成功させるための課題として里親の関心の薄さ、地理的に離れていること、会員の活動レベルの低さが挙げられた。一部の地方自治体は里親の完全なリストを提供することを拒否し、会員の勧誘が困難となっていた。これらの問題にもかかわらず、このような里親養育協会でのピア交流は、いくつかの研究で明らかになった条件の下では、里親の情報支援のニーズを満たすことが明らかになっている (Hinson Langford et al., 1997)。

## 共通理解

他者から学ぶ機会と密接に関連しているのは、理解を共有するという利点である。そのため、里親は他の里親が主導する研修や支援グループを特に評価していた (Sinclair et al., 2004; The Fostering Network, 2009; Triseliotis et al., 2000)。里親養育という役割の特殊性を考えれば、里親が同じような経験をした他の里親との交流に利点を感じたことは理解できる。里親は家族や友人の支援を頼りにしていたが、里親以外の方が里親の役割の課題を理解するのは難しいことを認識していた (McInerney, 2009)。例えば、Nutt (2006, p. 42) の調査に参加した里親は、子どもが措置変更されることを回避できるならば、里親は子どもからの暴力的な行為をしばしば黙認することを家族や友人は理解していないと語っている。

「(彼らの批判的なコメント) には非常に傷つきます。今は里親になった人と仲良くする方がいいですね。里親になった人と付きあう方が楽なのです…。彼らは里親という同じ立場にいて理解してくれますし、それがどのようなものかを知っていますから。」

他の里親は、難しい子どもの養育に伴うストレスを理解しているため (Blythe et al., 2011) 共感を得ることができる (Golding and Picken, 2004; The Fostering Network, 2009) と考えており、里親は同じような日々の経験をしているため、支援機関よりも支えとなると考えられることもあった (Cavazzi et al., 2010)。この共通理解は、Clarke (2009) も指摘している。

理解を共有することの利点は、ピア交流が行われた背景にかかわらず明らかであった。グループでの話

しあいを奨励したある研修プログラムでは、参加者はグループメンバーとの共通する感覚を持ったことが報告された (Allen and Vostanis, 2005)。地域の里親会もまた、里親会のアイデンティティを育むこの種の支援の貴重な場とみなされていた (Metcalf, 2010; Murray, 2007)。これらの里親会の価値を感じるかは、アイデンティティの共有感にある程度は左右されるが、男性里親のような里親コミュニティにおける少数派は、The Fostering Network (2010) や Henry (2003) によって説明されているような男性里親だけの会のような専門グループから多くの恩恵を受ける可能性がある。さらに、ピアメンター制度は、共通の経験にもとづく共感的な関係を里親に提供し、それがソーシャルワーカーよりも里親のメンターの方が「信頼できる」と言われている (Newstone, 2008)。しかし、手段的支援を求める里親が最初に連絡するのは、里親支援ソーシャルワーカーである。重要なことは、メンターが自分の話に耳を傾け、批判的にならずに自分が直面している課題をわかってくれると里親が感じていることである (McInerney, 2009)。この種の「非難しない」相互関係は、評価的支援のニーズを満たしていると考えられる (Hinson Langford et al., 1997)。

### 悩みを打ち明けること

里親になることがどのようなことなのかということを経験して理解することは、里親が自分の経験を話したい時に、親身になって聞いてくれることを意味する。ここで紹介された研究では、インタビューを受けた里親の多くは、ピア交流の重要な点として、自分の抱える問題を打ち明ける機会であると考えていた。インタビューを受けた、ある里親は次のように述べている (Blythe et al., 2011, pp.246-247)。

「私たちの友人 (里親でもある) は、私たちが誰かに話を聞いてもらいたい時があることを知っていますし、話を聞く方法も知っています。」

里親研修プログラム (Pallett et al., 2002; The Fostering Network, 2009; Warman et al., 2006) と同様に、地域の里親支援グループは、里親が問題を人に打ち明ける貴重な場であると見なされていた (Clarke, 2009; Murray, 2007)。しかし一部の里親は、焦点が定まらないとこのグループ交流が建設的でなくなることへの懸念を述べている。個人的な里親同士の交流も、問題を話し合うのに役立つと考えられていた (Dodsworth et al., 2012; McInerney, 2009; Murray, 2007)。

しかし、問題について話しあう際には、里親が自分の関わる里親養育について守秘義務を果たす必要があることには注意が必要である。研修プログラムや里親養育提供機関の安全なインターネットサイトで自分の経験を語って共有している里親の中には、守秘義務のガイドラインで認められているよりも、もっとオープンに話す機会がある方が有益だと感じている人もいる (Dodsworth et al., 2012; Hardwick, 2005)。一方で、特定の子どもに関して守秘義務が果たされていないことが、支援グループ、メンター制度、他の里親との個人的な交流の問題点となっていると指摘する人もいた (Murray, 2007; The Fostering Network, 2006, 2010)。守秘義務について合意を得たバランスを設けることで、里親支援グループの成果を高めることになる (The Fostering Network, 2009)。この問題にかかわらず、共通理解のある環境の中で養育の問題を打ち明けることは、里親の感情面の支援ニーズを満たす可能性がある。

## 手段的支援

これまで述べてきた仲間との交流の利点は、支援の情報面、評価面、感情面に関連するものだったが、同じように手段的支援も里親に評価されているというエビデンスがある (Hudson and Levasseur, 2002)。里親は、経験にもとづいた助言を受けられることに加えて、レスパイトケアという形で実用的な支援を、お互いに提供することもできる (Murray, 2007)。レスパイトはモッキンバード・ファミリー・モデルの中心的な特徴であり (Northwest Institute for Children and Families, 2007)、「ハブ」ホームは「コンステレーション」に属する里親にレスパイトを提供するために2~3床のベッドを確保しておくことが許可されている。このモデルが里親に人気があることは、レスパイトの機会の利用に反映されている。モッキンバードの里親の60%が評価された8ヶ月間にレスパイトケアを利用していたのに対し、一般共同体の里親は31%の利用であった。その違いは、レスパイトの利用頻度の高さにある。モッキンバードの里親の45%が月に2回以上のレスパイトケアを利用しているのに比べ、モッキンバード以外の里親ではわずか20%の利用であった。里親は、レスパイトを要請して利用する過程が、モッキンバードの仕組み以外で経験したものより前向きであり、モッキンバードモデルではレスパイトケアが使いやすいため措置解除を防ぐことができたと感じていた。さらに里親は、ハブホームが提供するレスパイトを担う里親が一貫しているため、より積極的にレスパイトを利用したと述べている。

これまで述べてきたように、Hinson Langford et al. (1997) が明らかにした4つの支援形態は、研修プログラム、地域の支援グループ、メンターやバディの関係、他の里親との個人的な交流など、多くのピア交流の場で見ることができる。さらに、今回の調査では、里親同士の交流から生まれる支援のもう一つの側面が明らかになった。それは、里親という役割が特に孤立している状況を反映していると考えられる (Blythe et al., 2011)。

## 孤立への対策

Nutt (2006) の研究では、里親になると友情の「境界線をひき直す」ことになるかと述べられている。既存の友人は、里子の行動に共感しないことや批判的になる可能性がある (Sinclair et al., 2004)。里親以外の人からの理解が得られないことは里親を傷つける。なぜなら子どもを養育する役割が里親個人のアイデンティティの一部になっているため、家族や友人が子どもの行動に寛容すぎると批判的な発言をすることは、里親の全アイデンティティを否定することになるからである (Nutt, 2006)。大多数の里親は家族や友人から多くの支援を受けていると感じているが (例: Sinclair et al., 2004)、Nutt (2006) は、自分を「里親」と見なす人は、そのアイデンティティを共有する他の里親のみが自分を完全に理解していると感じると主張している。この主張を裏づけるように、Blythe et al. (2011) は、里親仲間とのつながりを築くことができなかつた女性里親は社会的に孤立していると感じることを明らかにした。自分を母親だと思っけていても、社会の他の母親から、そのように見なされていながつたことが大きな理由であると述べている。

このレビューの研究に参加した里親は、里親であるがゆえの孤立感を和らげるために、他の里親との新しい交友関係を築いた、または築きたいと考えていることが多いと報告されている (例: Cavazzi et al., 2010 et al.)。これは、研修 (Hudson and Levasseur, 2002; Laybourne et al., 2008; Ogilvie et al., 2006) や支援グループ (Blythe et al., 2011; Brown et al., 2005; Murray, 2007) に参加することで得られるピア交流の機会を利用してかなうと考えられており、社会的な場として評価されることもあつた (Golding and Picken, 2004; The Fostering Network, 2009)。さらに、3件の研究において回答した里親は、里親が一人きりで養育をしているわけではないことを伝えるため、里親候補者に里親同士がお互いに支え合い、相談し合えることを示すことができる先輩里親に会わせることの重要性を強調している (Centre for Excellence in Child and Family Welfare, 2007; The Fostering Network, 2009; Wilson et al., 2004)。

里親の社会的孤立を解消する方法として比較的最近では、電子メールや専用オンラインフォーラムの利用が考えられる。しかし、里親による情報技術の利用を調査した研究は、これまでに 2 件しかなかった。Finn and Kerman (2004) は、自宅のコンピュータとインターネットアクセスが提供され、Building Skills-Building Futures 情報技術操作プログラムに参加した里親を調査した。里親は、インターネットを利用するようになって 1 年後には、他の里親とオンラインで話すと答える割合が高まった。しかし、他の社会的支援の項目（例：「助けを求めて人を頼る／インターネットを通じて他の人から役立つ情報を得る」）には変化がなく、利用率は低いままであった。調査終了時に他の里親とオンラインで連絡を取っていたのはわずか 3 分の 1 で、ほとんどの回答が「滅多にない」または「まったくない」と答えた。

同様に、Dodsworth et al. (2012) によるイングランドの 3 つの地方自治体が提供している里親用インターネットサービスの評価でも、情報技術の利用が限定的であることが報告されている。里親仲間と交流するためにサービスを時々利用していると答えたのは回答者の 27% のみであったが、この数字は Facebook などの代替ソーシャルネットワーキングサイト (SNS) を利用している 34% に匹敵するものだった。一般的に里親は直接会って話すか電話で話す方が、より「個人的なもの」であるとして好むと述べている。しかしインターネットのサイトは、特に孤立した地域に住む里親にとっては、貴重な支援源になる可能性があることを著者は指摘している。里親養育の将来における情報技術の必要性についても議論があった。この研究に参加した里親の中には、自分の役割の目的は子どもと接することであり、情報技術の知識が必要であるなら、里親になることを躊躇してしまう人もいると感じていた。一方で情報技術能力の向上は、里親の専門性に必要な要素であると考える里親もいた。

これら 2 つの研究の著者は、里親のインターネット支援サービスの利用に影響を与える可能性のある要因を明らかにした。Finn and Kerman (2004) は、研究に参加した里親が支援を受けるためのオンライン上の資源の探し方や利用方法について何の指導も受けていなかったことを指摘したが、これは里親が、このような目的のために科学技術を使用することを促進するための重要な要素であると考えられる。同様に、Dodsworth et al. (2012) の研究では、回答者である里親の大多数は、サービス開始時に支援のためのオンライン上の資源の探し方や使用方法の訓練を受けていない、または受けた訓練が役に立たなかったと回答しており、79% は、継続的なサポートは最小限であるか、または全くないと回答した。また、Dodsworth et al. (2012) は里親に対するインターネットサービスの実施方法の違い（例えば、ある自治体ではコンピュータを提供したが、別の自治体では提供しなかったなど）を強調しており、これらの違いは効果的なコミュニケーションを実現するためのものからコスト削減のためのものまで、この方法を採用した動機を反映していた。著者らは、里親養育提供機関がインターネットサービスの推進を表明した「優れた実践」の例として、サイトの責任者に主要なスタッフを指名したり、資源を割り当てたり、一部の里親がオンラインでピアサポートを提供する「支持者」になることを奨励している。

## ピア交流は、里親、子ども、里親委託措置の成果をどの程度改善するのか？

### 成果の測定

驚くべきことに、このレビューに含まれている研究のうち、ピア交流の改善についての里親の考察が含まれた研究はあるが、ピア交流と里親、子ども、里親委託措置の成果との直接的な関係を調べた研究はわずかであった。レビューされた研究からは、里親の定着、里親の精神衛生、里親委託措置の安定性という3つの成果が明らかになった。

2件の研究 (Rhodes et al., 2001; Sinclair et al., 2004) では、ピア交流と里親の定着との関連性が調べられた。Rhodes et al. (2001) は、米国の里親にインタビューを行い、バディ制度に参加していた里親とそうでない里親の定着率を比較した。その結果、里親を続けている人は、里親をやめる予定の人やすでにやめた人よりもバディがいる可能性が高く、このグループ間に有意な差があることがわかった。里親を続けている人と比べて、里親をやめた人は、他の里親から養育についての情報を得たと答えた人が少なかった。著者は、この結果を互いに学びあう機会が関係している可能性があると考えた。

英国の研究で、Sinclair et al. (2004) は、里親が里親養育を継続するかやめるかを決定する際に、地域の支援グループへの参加がどのような役割を果たすかについて調べた。著者らは、回答者である里親の85%が、利用可能な地域の支援グループがあったが、そこに定期的に参加していたのは3分の1のみであり、全く参加していなかった里親も3分の1いることを明らかにした。支援グループへの定期的な参加は、里親の教育レベルや雇用レベルの低さと関係しており、仲間に支えられていると感じることとはプラスの関係があった。支援グループに定期的に参加している里親の90%が他の里親に頼ることができると感じていると回答したのに対し、支援グループに参加しない里親は半数にとどまっていた。

重要な点は、自分の意思で、あるいは選択肢がなかったためにグループに参加しなかった里親は、時々または定期的にグループに参加した里親と比べて、里親をやめる可能性が高かった。さらに、他の里親からの支援が足りないと感じている里親は、「ある程度」または「かなり」支援を受けていると感じている里親よりも、里親をやめる可能性が高いことが明らかになった。ピアサポートは、受けた研修の量や里親養育の経済的利益の認識など、「専門的な」支援の他の側面にも関連していた。最後に、他の里親に支えられていると感じることと里親養育に対する肯定的な態度との間には、わずかではあるが有意なプラスの関係が見られた。著者らは、ここで示された関係性は強いものではなく、どちらの方向にも関係があることを示していると指摘した。つまり支援グループへ参加することは、里親の養育への取組みを高めるだけでなく、現在の養育への取組みの程度を反映したものである。支援グループに参加しない人々は、すでに社会的に孤立しているか、あるいは逆に友人や家族など他から十分に支援されていると感じている可能性もある。しかし今回のレビューでは、これらの選択肢を具体的に検討した研究はなかった。

里親と里親委託措置の成果に対するピアサポートの価値に関するエビデンスは、3つの研究における里親の意見や考察によって裏付けられた。性化行動に関する研修プログラム (Hardwick, 2005) に参加した里親は、グループの助言と支援のおかげで、困難な里親委託措置をなんとか維持できたと述べている。同様に、モッキンバードの仕組み (Northwest Institute for Children and Families, 2007) に参加した多くの里親は、レスパイトケアが利用できるのおかげで、子どもの問題行動が原因で生じたかもしれない措置解除を避けられたと述べている。Blythe et al. (2011, p. 246) の研究においてインタビューに答えた里親は、里親仲間との関係が重要であることについて次のように語った。

「里親になって良かったことの一つは、地域の支援グループで新しい仲間ができたことです。この仲間がいなければ、今でも里親にはなれなかったと思います。」

次に5つの研究で直接測定された成果は里親の精神衛生に関するものであった。Cole and Eamon (2007) による研究では、米国の里親を対象に、地域支援グループへの参加と里親の抑うつ症状の程度に着目した。調査協力者の58.7%が里親支援グループに参加していた。支援グループに参加しなかった、または参加したが役に立たないと感じた里親に比べて、支援グループに参加している里親は抑うつ症状の程度が低いことがわかった。しかし里親に対して支援グループの何が役に立ったのかという質問がされなかったため、互いに学びあうことや孤立感を和らげるなどの要因との相対的な重要性を評価することは困難であった。同様に、その効果が逆である可能性があり、うつ状態のより強い人が支援グループに参加したくないと感じていた。

Sinclair et al. (2004) の研究では、里親の負担を測る指標として短い General Health Questionnaire を使用した。著者は、他の要因を考慮した場合、他の里親からの支援の少なさと里親のストレスの高さは関係がないことを明らかにした。この結果は、家族やソーシャルワーカーからの支援が不足している場合、不快な出来事（措置解除や里親への申し立てなど）が多い場合、里親の経験が乏しい場合にストレスが生じる可能性があることを示している。したがって、仲間に支えられていないと感じることは、里親のストレスを高める要素にはならないと考えられる。

しかし、レビューを行った研究における里親の考えでは、支援グループを介してであろうが個人的な交流であろうが、ピアサポートが自身の精神衛生上「不可欠」であることが示されている（例：Murray et al., 2011）。それらのコメントは、共感できる仲間と問題について話し合う機会が特に重要であったことを示している。

里親養育の経験を人に打ち明けることで、里親としてのストレスが軽減されるという感覚があり（Golding and Picken, 2004）、研修中に養育の問題について率直に話す機会は、治療効果があると見なされていた（Hardwick, 2005）。同様に、男性里親のためのストーリーテリング<sup>監訳者注6</sup>研修会で問題を言葉にして話す経験は、「精神的浄化作用のプロセス」と考えられていた（The Fostering Network, 2010, p. 9）。

<sup>監訳者注6</sup> 物語を語り聞かせること

第三の成果は、モッキンバード・ファミリー・モデルの評価において、Northwest Institute for Children and Families (2007) によって測定された里親委託措置の安定性である。著者らは、里親委託措置の安定性に関してデータがある44人の子どもたちのうち84%が評価期間の8ヶ月間1つの里親家庭に留まって生活したと報告した。また兄弟と一緒に里親委託措置を受けた場合（モッキンバード以外の里親家庭と比べると有意に多い）も8ヶ月間ずっと兄弟と一緒に生活したと報告している。またモッキンバード・モデルは、措置変更された場合でも子どもたちに安定感を与えることができる。このモデルでは「コンステレーション」内での措置変更を可能とするように設定されているため、子どもたちは同じ学校に通い、地域内のつながりを維持することができる。

今回のレビューでは、里親同士の交流の結果、しばしば非公式の社会的な行事を通して若者同士の交流が増えることがあったけれども、里親同士のピア交流に直接関係した子どもへの成果を報告した研究はなかった。研修プログラムについて報告された論文の中には、里親が報告した子どもの問題行動が大幅に減少したというものがいくつかある（例：Golding and Picken, 2004; Pallett et al., 2002）。しかし、これらの改善が他の里親の助言によるものなのか、研修の講師が示した情報や資料によるものなのか、あるいは里親の自信の向上（これも報告されている）などの研修経験の他の要素による成果なのかを判断することはできなかった。

## 里親のキャリアの時期

里親のキャリアの時期によって、必要とされる具体的なピア交流の種類が異なる可能性がある。特に新しい里親は、同じような経験を持つ人と話す機会を持つことで、実用的なアドバイスや互いに支えあっている感覚を得られるという利点がある (Wilson et al., 2004)。同様のニーズは、新しい状況や初めて異常な状況に直面した経験豊富な里親にも生じる可能性がある。里親委託措置が進むにつれて、里親がピアサポートを利用したいと思うようになるのは特定のニーズがあるからである。これには、性化行動などの重要なテーマの研修に参加すること (Hardwick, 2005) や緊急に里親を確保する問題を解決するために里親養育協会に連絡すること (Heath and Newstone, 2010) などが含まれる。

ストレスが増大すると、里親は仲間に感情的な支援と実用的な支援の両方を求めるようになる。Hudson and Levasseur (2002) の研究に参加したある里親は、ストレスレベルが高く、「うまく対処できていない」と判断されることを恐れずに他の里親と話し合う必要がある際には、感情的な支援が特に重要であると述べている。この研究に参加した他の里親もレスパイトケアという実用的な支援の重要性を強調している。

適切な時期に適切な種類の支援を受けることは、里親養育の成果に大きな影響を与える可能性があり、Sinclair et al. (2004) は、認知された支援が里親のストレスや人生における大きなできごとと相互に作用して、里親を続けるかやめるかを決定することに影響を与えると述べている。

## 里親同士の交流を増やし、それによって成果を改善する可能性がある介入とは？

里親同士の交流から子どもや里親の成果を報告した研究の数が少ないため、一般化するには慎重にならざるを得ない。しかしこれらの研究から地域の支援グループ、メンター制度やバディ制度は里親を支援し、里親の定着率を高めるのに有効である可能性があることがわかった。さらに、比較された成果がほとんど報告されていないが、里親が他の里親のトレーニング、支援、育成に関わることについては多くの研究で明らかになっている。The Fostering Network (2009, p. 83) の調査の中で、ある地方自治体の里親養育提供機関は、こう述べている。

「効果的なトレーニング、支援、育成は、里親の意見にもとづいて、可能な限り里親が行わなければならない。ピア教育は、里親とサービスにとって相互に有益である...」

このレビューでは、地域の支援グループ、ネットワーク、特定の利益団体、バディ制度、メンター制度、ヘルプライン、里親主導の研修など、さまざまな形態のピア交流が支援と学習を提供していることが里親から報告された。しかし、これらがどのように行われているのか、また、里親や子ども・若者にとっての具体的な成果を示す確固たるエビデンスは、少数の研究に限られている。

## 現在のエビデンスベースの限界

里親同士のピア交流とピアサポートに特に焦点を当て、里親への成果を報告した研究は 4 件のみであった (子どもへの成果は報告されていない)。ほとんどの研究は質的研究であり、その結果、ピア交流の利点についての里親の認識について興味深い洞察が得られたが、比較群や対照群を用いた介入の確実な評価はなかった。このことは里親養育提供機関が里親同士の交流と支援を発展させ、比較群を用いてその成果を評価する介入研究が必要であることを示している。

## 結論

レビューの結果、里親同士のピア交流に関する文献には、いくつかの重要なテーマがあることが明らかになった。

- ・里親同士のピア交流は、監督する里親支援ソーシャルワーカーや家族、友人により提供される有益な支援のネットワーク以上に、感情的支援（思いやりと共感の提供）、手段的支援（具体的な支援）、情動的支援（問題解決の支援）、評価的支援（肯定的なフィードバック）などの、数多くの重要な支援ニーズを満たすことができる（Hinson Langford et al., 1997）。さらに、ピア交流は、里親が経験する孤立感を和らげるのを助ける（Blythe et al., 2011）。

- ・里親同士の交流も、グループで話しあう場が「井戸端会議」やソーシャルワーカーを非難する場になってしまえば、あまり良い経験にならない（Murray, 2007）。グループのファシリテーターの役割の重要な点は、悩みを打ち明ける機会が否定的で気落ちするような議論にならないようにすることである（The Fostering Network, 2009）。その役割はセラピストが担うべきだという意見もある（Hughes, 2004）。

- ・ピア交流と里親、子ども、里親委託措置への利益との直接的な関係を調べた研究は、わずか4件であった。2つの研究では、ピア交流とそれによって支援されているという里親の認識が里親を継続する可能性を高め（Rhodes et al., 2001; Sinclair et al., 2004）、里親養育に対するより前向きな態度（Sinclair et al., 2004）と関連していることが示された。さらに、3つ目の研究ではピア交流の増加とうつ病の可能性の低下との関連が示された（Cole and Eamon, 2007）。4つ目の研究では、レスパイトケアが利用できる機会を高めることで、措置解除を避けられる可能性があることが示された（Northwest Institute for Children and Families, 2007）。

- ・地方自治体や独立型里親養育提供機関は、「すべてに当てはまる」アプローチが役に立たないことを理解しているため、さまざまな形態のピア交流の機会を提供している。里親同士が会うための機会として、地域の支援グループ、権利擁護団体、社会的交流、研修会、メンター制度やバディ制度がある。

国際的な論文から、里親が互いに学びあい、社会的孤立を和らげるために問題を打ち明けて、問題を共通理解する他の里親と相談するために会う機会が、重要な要素であることが浮かび上がってきた。里親のキャリアにおいて特定の時期での支援ニーズの違いと、個々の里親の支援ニーズの違いを考慮する必要があるため、「すべてに当てはまる」アプローチが有益でないと考えられる。それにもかかわらず、里親の認識には共通点があることから、今回の調査結果がより幅広い関心を集め、政策や実践に活用できる可能性があることを示している。

## 政策と実践のための提言

このレビューでは、子どもに特化した有効性に関して限られたエビデンスしか得られていないが、里親が利点を認識していることや、いくつかの研究では、里親の定着率の向上、里親の精神衛生および里親委託措置の安定性が改善されたことを示すエビデンスが出てきており、今後の方向性を示している。里親養育提供機関は、以下の調査結果の中から選択して、里親同士のピア交流・ピアサポートを発展する方法を開発することができる。これらの介入は、比較グループを用いて厳密に評価され、大規模な展開のためのエビデンスになるかもしれない。

- ・ニーズの特定：ピアサポートの提供は、里親主導で行われるべきである。このことは、里親養育提供機関は、提供する制度が利用者のニーズに合致しているかを確認するために、里親と相談する必要があることを意味している (Clarke, 2009)。
- ・メンター制度とバディ制度：新規の里親と経験豊富な里親をペアにすることは、特にこの関係がメンター制度の形で公式なものとなっている場合 (Newstone, 2008) には、経験豊富な里親が支援を必要とする新たな課題に直面する可能性があることを認めた上で、双方の里親に利益をもたらす。
- ・既存の援助に機会を組み込む：里親のための定期的な研修では、里親が経験や問題解決の方法を共有する機会を設けるべきである。これは (特定の状況下で) 里親の自己効力感を高め、孤立感を減らすことが研究で示されている (et al. : Golding and Picken, 2004)。
- ・地域の里親グループの提供：可能であれば地域の里親グループを提供し、里親が地理的に分散している場合 (例：農村部) にはオンラインでの代替手段を提供する。里親の中には、地理的な距離があるために集会への参加を控える人もいる (Heath and Newstone, 2010)。
- ・オンラインサポートの効果的な促進：里親へのコンピュータの提供とインターネットへのアクセスを提供する仕組み (例：Finn and Kerman, 2004) は、これらが提供するピアサポートの機会を明確にする必要がある。オンラインでのピア交流には魅力を感じない里親もいるが、サービス提供機関が継続的な訓練や支援を含めてインターネットサービスに時間と資源を配分することで、オンラインでのピア交流を支援することができる (Dodsworth et al., 2012)。
- ・グループの効果的な促進：いくつかの研究 (例：Maclay et al., 2006) では、里親は経験豊富な里親、セラピスト、またはソーシャルワーカーによるグループの効果的な促進の必要性を認めているものの、支援グループがソーシャルワーカーから独立していることを希望していた (The Fostering Network, 2009)。
- ・条件付きの守秘義務の展開：里親がグループでの話し合いで「心を開く」ことができると感じるのと守秘義務を果たす必要があることとの間には緊張関係がある (Murray, 2007)。Hardwick (2005) は条件付きの守秘義務の許可が、支援する上で有益な場合があることを示している。
- ・レスパイトの仕組みの開発：里親養育提供機関は、「ハブ」および「コンステレーション」と呼ばれる共同体を開発する可能性を探ることができる。この共同体では、一人の里親がレスパイトを承認され、その里親の共同体に提供される (モッキンバード・ファミリー・モデルを参考)。

## 研究のための提言

このレビューでは、里親同士の交流機会を増やすことでピアサポートを向上させることを目的とした介入を報告・評価した研究が不足していることが明らかになった。また、導入、助言・指導、研修、監督など里親養育を改善するためのより一般的な取り組みに里親を含めることの効果についても、同様に研究が不足していた。これらの分野における評価研究は、主に里親からのフィードバックや提供された活動への里親の参加に限定されていた。支出を正当化することや成果を保証するためには、このようなエビデンスでは不十分である。そのために以下のような研究が必要である：

- ・ピア交流と、里親の意欲、満足度、定着度、子どもの行動、発達、幸福度、里親委託措置の安定性などの関連する成果との直接的な関係を検証する。
- ・介入前後の測定、無作為化対照試験、独自の対照設計、対照群や比較群などの厳格な評価方法を使用する。
- ・里親の支援、導入、助言・指導、研修、継続的な専門性の発展に里親を関与させることの効果を体系的に検討する。
- ・レスパイトと支援を提供するためのモッキングボード・ファミリー・モデルの他国での再現や里親と子どもを支援するための新しい技術の利用など、有望な介入を検討する。

Rees Centre は、強力で役に立ちかつ適時的な調査を提供することに尽力しています。今回のレビューで得られた知見を幅広い利害関係者と協議し、これらの提言をどのように進めていくかを検討していく予定です。皆様のご意見をお待ちしております。

Nikki Luke

- 研究員

Judy Sebba

- 責任者

Rees Centre for Research in Fostering and Education

リース里親養育・教育研究センター

rees.centre@education.ox.ac.uk

## 参考文献

- Allen, J. and Vostanis, P. (2005). The impact of abuse and trauma on the developing child: an evaluation of a training programme for foster carers and supervising social workers. *Adoption & Fostering*, 29(3), pp.68-81.
- Blythe, S.L., Jackson, D., Halcomb, E.J. and Wilkes, L. (2011). The stigma of being a long-term foster carer. *Journal of Family Nursing*, 18(2), pp.234-260.
- Brown, J. D., Sigvaldason, N. and Bednar, L. M. (2005). Foster parent perceptions of placement needs for children with a fetal alcohol spectrum disorder. *Children and Youth Services Review*, 27, pp.309-327.
- Cavazzi, T., Guilfoyle, A. and Sims, M. (2010). A phenomenological study of foster caregivers' experiences of formal and informal support. *Illinois Child Welfare*, 5(1), pp.125-141.
- Centre for Excellence in Child and Family Welfare Inc. (2007). *Strengthening the recruitment and retention of foster carers in Victoria*. [pdf] Melbourne, Australia: Centre for Excellence in Child and Family Welfare Inc. Available at: [http://www.cfecfw.asn.au/sites/www.cfecfw.asn.au/files/Monograph 16 Strengthening The Recruitment and Retention of Foster Carers in Victoria Web.pdf](http://www.cfecfw.asn.au/sites/www.cfecfw.asn.au/files/Monograph%2016%20Strengthening%20The%20Recruitment%20and%20Retention%20of%20Foster%20Carers%20in%20Victoria%20Web.pdf) [Accessed 13 November 2012].
- Clarke, H. (2009). *Getting the support they need: findings of a survey of foster carers in the UK*. [pdf] London: The Fostering Network. Available at: [http://www.fostering.net/sites/www.fostering.net/files/public/resources/reports/support\\_survey\\_240909.pdf](http://www.fostering.net/sites/www.fostering.net/files/public/resources/reports/support_survey_240909.pdf) [Accessed 09 November 2012].
- Cohen, G. D., Perlstein, S., Chapline, J., Kelly, J., Firth, K. M. and Simmens, S. (2006). The impact of professionally conducted cultural programs on the physical health, mental health, and social functioning of older adults. *The Gerontologist*, 46(6), pp.726-734.
- Cole, S. A. and Eamon, M. K. (2007). Predictors of depressive symptoms among foster caregivers. *Child Abuse & Neglect*, 31(3), pp.295-310.
- Colton, M., Roberts, S. and Williams, M. (2008). The recruitment and retention of family foster-carers: an international and cross-cultural analysis. *British Journal of Social Work*, 38(5), pp.865-884.
- Department for Education (2012). *Outcomes for children looked after by local authorities in England, as at 31 March 2012: Statistical First Release (SFR 32/2012)*. [pdf] London: Department for Education. Available at: <http://media.education.gov.uk/assets/files/pdf/s/sfr32-2012v2.pdf> [Accessed 19 December 2012].
- Dodsworth, J., Bailey, S., Schofield, G., Cooper, N., Fleming, P. and Young, J. (2012). Internet technology: an empowering or alienating tool for communication between foster-carers and social workers? *British Journal of Social Work*. Advance online publication. doi: 10.1093/bjsw/bcs007
- Farmer, E., Lipscombe, J. and Moyers, S. (2005). Foster carer strain and its impact on parenting and placement outcomes for adolescents. *British Journal of Social Work*, 35(2), pp.237-253.
- Finn, J. and Kerman, B. (2004). The use of online social support by foster families. *Journal of Family Social Work*, 8(4), pp.67-85.
- Garland, A. F., Hough, R. L., McCabe, K.M., Yeh, M., Wood, P. A. and Aarons, G. A. (2001). Prevalence of psychiatric disorders in youths across five sectors of care. *Journal of the American Academy of Child & Adolescent Psychiatry*, 40(4), pp.409-418.
- Golding, K. and Picken, W. (2004). Group work for foster carers caring for children with complex problems. *Adoption & Fostering*, 28(1), pp.25-37.
- Hardwick, L. (2005). Fostering children with sexualised behaviour. *Adoption & Fostering*, 29(2), pp.33-43.
- Heath, D. and Newstone, S. (2010). *Reinforcing networks: an exploration of foster care associations across England*. [pdf] London: The Fostering Network. Available at: [http://www.fostering.net/sites/www.fostering.net/files/public/resources/reports/reinforcing\\_networks\\_aug2010.pdf](http://www.fostering.net/sites/www.fostering.net/files/public/resources/reports/reinforcing_networks_aug2010.pdf)
- Henry, R. (2003). The challenging role for men in foster care. *Adoption and Fostering*, 27(2), pp.74-75.

- Hinson Langford, C. P., Bowsher, J., Maloney, J. P. and Lillis, P. P. (1997). Social support: a conceptual analysis. *Journal of Advanced Nursing*, 25(1), pp.95-100.
- Hudson, P. and Lévasséur, K. (2002). Supporting foster parents: caring voices. *Child Welfare*, 81(6), pp.853-877.
- Hughes, D. (2004). An attachment-based treatment for maltreated children and young people. *Attachment & Human Development*, 6, pp. 263-278.
- Ivanova, V. and Brown, J. (2010). Support needs of Aboriginal foster parents. *Children and Youth Services Review*, 32, pp.1796-1802.
- Laybourne, G., Andersen, J. and Sands, J. (2008). Fostering attachments in looked after children: further insight into the group-based programme for foster carers. *Adoption & Fostering*, 32(4), pp.64-76.
- Maclay, F., Bunce, M. and Purves, D.G. (2006). Surviving the system as a foster carer. *Adoption & Fostering*, 30(1), pp.29-38.
- McInerney, A. (2009). Somebody to lean on: peer mentoring as a support mechanism for foster carers. *Critical Social Thinking: Policy and Practice*, 1, pp.249-263.
- Metcalfé, W. A. (2010). *The experience of older foster parents*. Ph. D. North Dakota State University of Agriculture and Applied Science, Fargo. Available at: <http://search.proquest.com/docview/822181642> [Accessed 23 October 2012].
- Murray, L. (2007). *Foster and kinship caregiver perceptions of support and training in Canterbury, New Zealand*. M. Ed. University of Canterbury, New Zealand. Available at: [http://ir.canterbury.ac.nz/bitstream/10092/1061/2/thesis\\_fulltext.pdf.txt](http://ir.canterbury.ac.nz/bitstream/10092/1061/2/thesis_fulltext.pdf.txt) [Accessed 12 November 2012].
- Murray, L., Tarren-Sweeney, M. and France, K. (2011). Foster carer perceptions of support and training in the context of high burden of care. *Child and Family Social Work*, 16, pp.149-158.
- Newstone, S. (2008). *Foster carer peer mentoring: good practice guidelines for establishing and running a peer mentoring scheme*. [pdf] London: The Fostering Network. Available at: [http://www.consultingmatters.co.uk/html/peer\\_mentoring.pdf](http://www.consultingmatters.co.uk/html/peer_mentoring.pdf) [Accessed 12 November 2012].
- Northwest Institute for Children and Families (2007). *Mockingbird Family Model project evaluation*. [pdf] Available at: [http://www.mockingbirdsociety.org/images/stories/docs/MFM/nwicf\\_2007-5\\_report.pdf](http://www.mockingbirdsociety.org/images/stories/docs/MFM/nwicf_2007-5_report.pdf) [Accessed 18 January 2013].
- Nutt, L. (2006). *The lives of foster carers: private sacrifices, public restrictions*. London: Routledge.
- Ogilvie, A., Kirton, D. and Beecham, J. (2006). Foster carer training: resources, payment and support. *Adoption & Fostering*, 30(3), pp.6-16.
- Pallett, C., Scott, S., Blackeby, K., Yule, W. and Weissman, R. (2002). Fostering changes: a cognitive-behavioural approach to help foster carers manage children. *Adoption & Fostering*, 26(1), pp.39-48.
- Rhodes, K. W., Orme, J. G. and Buehler, C. (2001). A comparison of family foster parents who quit, consider quitting, and plan to continue fostering. *Social Service Review*, 75(1), pp.84-114.
- Rostill-Brookes, H., Larkin, M., Toms, A. and Churchman, C. (2011). A shared experience of fragmentation: making sense of foster placement breakdown. *Clinical Child Psychology and Psychiatry*, 16(1), pp.103-127.
- Selwyn, J. and Quinton, D. (2004). Stability, permanence, outcomes and support: foster care and adoption compared. *Adoption & Fostering*, 28(4), pp.6-15.
- Sinclair, I., Gibbs, I. and Wilson, K. (2004). *Foster carers: why they stay and why they leave*. London: Jessica Kingsley.
- Tarren-Sweeney, M. and Hazell, P. (2006). Mental health of children in foster and kinship care in New South Wales, Australia. *Journal of Paediatrics and Child Health*, 42(3), pp.89-97.
- The Fostering Network, (2006). *Improving effectiveness in foster care recruitment: an interim report of the Innovation in Foster Care Recruitment Survey*. [pdf] London: The Fostering Network. Available at: [http://www.fostering.net/sites/www.fostering.net/files/public/resources/reports/recruitment\\_report.pdf](http://www.fostering.net/sites/www.fostering.net/files/public/resources/reports/recruitment_report.pdf)

[Accessed 09 November 2012].

The Fostering Network (2009). *Learning together: learning from each other*. London: The Fostering Network.

The Fostering Network (2010). *Men who care: experiences and reflections from male foster carers*. [pdf] London: The Fostering Network. Available at: [http://www.fostering.net/sites/www.fostering.net/files/public/resources/good-practice-guidance/men\\_who\\_care.pdf](http://www.fostering.net/sites/www.fostering.net/files/public/resources/good-practice-guidance/men_who_care.pdf) [Accessed 09 November 2012].

Triseliotis, J., Borland, M. and Hill, M. (2000). *Delivering foster care*. London: British Agencies for Adoption and Fostering (BAAF).

Warman, A., Pallett, C. and Scott, S. (2006). Learning from each other: process and outcomes in the Fostering Changes training programme. *Adoption & Fostering*, 30(3), pp.17-28.

Wilson, K., Sinclair, I., Taylor, C. and Pithouse, A. (2004). *Fostering success: an exploration of the research literature on foster care*, Knowledge Review 5. [pdf] London: Social Care Institute of Excellence. Available at: <http://www.scie.org.uk/publications/knowledgereviews/kr05.pdf> [Accessed 09 November 2012].

## 付録 - 表 1

### レビューに含まれる研究の詳細

文献	国	参加者数	方法論
Allen and Vostanis, 2005	英国	17 人	グループインタビュー
Blythe et al., 2011	オーストラリア	20 人	インタビュー
Brown et al., 2005	カナダ	63 人	電話インタビュー
Cavazzi et al., 2010	オーストラリア	7 人	インタビュー
Centre for Excellence in Child and Family Welfare, 2007	オーストラリア	73 人	インタビューとグループインタビュー
Clarke, 2009	英国	442 人	オンライン・アンケート
Cole and Eamon, 2007	米国	204 人	電話インタビュー
Dodsworth et al., 2012	英国	205 人 (アンケート)。27 人 (グループインタビュー)	オンライン/郵送アンケートとグループインタビュー
Finn and Kerman, 2004	米国	64 人	郵送アンケートと電話インタビュー
Golding and Picken, 2004	英国	38 人	アンケートとグループインタビュー
Hardwick, 2005	英国	11 人	インタビューとグループインタビュー
Heath and Newstone, 2010	英国	68 人 (アンケート)。6 人 (インタビュー)。4 グループインタビュー	郵送アンケート、インタビュー、グループインタビュー
Hudson and Levasseur, 2002	カナダ	66 人	郵送アンケート
Ivanova and Brown, 2010	カナダ	83 人	電話インタビュー
Laybourne et al., 2008	英国	8 人	インタビューとアンケート
Maclay et al., 2006	英国	9 人	インタビュー
McInerney, 2009	アイルランド	6 人	インタビュー
Metcalfe, 2010	米国	37 人	インタビュー
Murray, 2007	ニュージーランド	17 人	インタビューとアンケート
Murray et al., 2011	ニュージーランド	17 人	インタビューとアンケート
Newstone, 2008	英国	英国の自治体の「約半数」「一部の」独立した里親養育提供機関、里親養育協会、里親	オンライン・アンケート、グループインタビュー、事例研究
Northwest Institute for Children and Families, 2007	米国	22 世帯の里親家庭	社会活動に関するアンケートと観察
Nutt, 2006	英国	46 人	インタビュー

Ogilvie et al., 2006	英国	里親 139 人と里親支援ソーシャルワーカー 124 人 (グループインタビュー) 里親 1181 人 (アンケート)	グループインタビューと郵送アンケート
Pallett et al., 2002	英国	55 人	アンケート
Rhodes et al., 2001	米国	252 人	郵送アンケートと電話インタビュー
Sinclair et al., 2004	英国	1528 人 (地方自治体の全数調査)。944 人 (ア ンケートに回答した里親)	郵送アンケート
The Fostering Network, 2006	英国	18 の地方自治体	電話インタビューとグループインタビュー
The Fostering Network, 2009	英国	里親 28 人、サービス提供者 38 人 (オンラ インアンケート)。里親 15 人、サービス提 供者 11 人 (郵送アンケート)。里親 8 人、 サービス提供者 6 人 (グループインタビュ ーまたはインタビュー)	オンライン・アンケート、郵送アンケート、 グループインタビューまたはインタビュー
The Fostering Network, 2010	英国	12 人	ワークショップ
Triseliotis et al., 2000	英国	822 人 (郵送アンケート)。67 人 (グループイ ンタビューまたはインタビュー)。	郵便アンケートとグループインタビューまた はインタビュー
Warman et al., 2006	英国	39 人	アンケート
Wilson et al., 2004	英国	里親の相談会 2 件	グループインタビュー

早稲田大学大学院総合研究機構  
社会的養育研究所  
監訳チーム  
担当：中川 友生（神戸市総合療育センター）  
2022（令和4）年2月

Supported by  日本 THE NIPPON  
財団 FOUNDATION